

私の履歴書

相澤 秀一

私が本学に勤めるようになってから今年の三月末で丁度五年と六ヶ月になる。そして定年で本学を去る。「学会」委員が本誌本号を私の退職記念号にするという。光榮の至りである。私の略歴は年譜式に本誌に別載されている通りであるが、編集委員から右をコメントする意味において一文を綴れと要請されたので、極めて無味乾燥な略伝を綴ることにする。

私の原籍地は新潟県糸魚川市―大糸線の北端、日本海に面した田舎町であるが、出生地は今日の高知市である。医者であった父が高知の病院に勤務していたからである。然し高知での生活は三才位までで、幼・少年期は北陸の糸魚川で送った。小学校も中学校も糸魚川である。中学校では、「都の西北早稲田の森」の作詞者である相馬御風が此の土地に隠住されていて、当時五年生であった私たちに週一回、「日本文学史」の講義をされたことが、今でも鮮明に記憶されている懐しい思い出である。高等学校は金沢の第四高等学校。昭和五年に京都大学経済学部を卒業して大学院に入学したが、研究室の雰囲気になじめず、翌年東京に出て横浜専門学校（現在の神奈川大学）の講師となった。青二才の身で経済学史と社会政策を担当させられた。東京生活では戸坂潤さんが主となって活動されていた「唯物論研究会」に加わって毎週の研究集会で談論し合ったのも忘れえない思い出である。

昭和六年東京での生活をはじめたとき結婚した。東京生活も二年で打ち切って再び京都に舞い戻ってきた。理由は、文字通りの浅学菲才の身にとって専門学校での講義が重荷でならず、もっともっと研究してからでなければと思って、そのためには振り出しに帰って京都大学で研究生活に入るのがいいと考えたからである。京都大学には学史・理論の研究にとって貴重な文献が山積されている。研究生活の他方では物質的生活の基盤を作らねばならぬので、今は故人になっておられる当時京都大学経済学部の教授であった谷口吉彦先生のお世話で当時の京都府立京都第一中学校にアルバイトの口を作っていた。公民科の授業嘱託がそれである。「公民科」と言うのは昔の「法制経済」のことである。京都府知事の蜷川さんも京都一中で此の科目を担当された。蜷川さんの次ぎは中川与之助さん、その次ぎがいま甲南大学で教授をしている金持一郎君、そして私という順序であったように記憶している。そして一番長く一中教師をしたのが私というわけで、はじめは嘱託であったが、そのうちに学校の都合上の要請で教諭となった。当時、居を北白川に構えていたので、電車による通勤は極めて不便なために、しばしば北白川から現在の洛北高校に歩いて通ったものだ。一中教師としての生活は昭和八年から十四年の三月までで、恰も中風で臥床した切りの父をかかえていたので、よるこんで京都での一中教師生活を享受した。昭和十二年に上梓した『黎明期の市民経済学』、翌年出版した『経済学説史』は共に一中教師生活時代の労作である。なお此の頃の友人で未だに親交をつづけているのは長谷部文雄さんと梯明秀さん。

今一つの想い出は京都生活の晩年に大阪の天神橋六丁目近くにあった関西大学の夜学部の経済学史を担当して、帰途いつも末川先生と一緒に四條大宮の喫茶店で御馳走になって熊野神社まで帰りを一緒にしたことだ。

昭和十四年四月、京都一中を退いて神田駿河台にあった東亜研究所につとめた。この間十四年十月から十五年

五月迄、北京で生活した。十六年一月末、宮川実さんの身代りとして、河上先生のおすすめによって山口高等商業学校に赴任した。小京都といわれる山口の町は住み心地の良いところである。だが十六年十一月八日の対米開戦とともに暗い学園生活となる。勤労働員、学徒出陣、それも昭和二十年八月の敗戦とともに終る。

昭和二十二年四月に第一回の参議院選挙が行なわれた。柄にもなく、また周囲からの要請に断固断わりえぬ意志薄弱の故か、山口県地方区で立候補する。当時の規定では立候補とともに公務員の地位を去る必要がなかった。然し結果的には、山口大学へと山口経専が新発足するにあたって私は教職を去った。いわゆる「赤追放」である。山口で浪人生活すること一年、旧制大阪商科大学の友人に迎えられて大阪市立大学経済学部で奉職する。

ここで本学部の同僚教授・井上晴丸さんとの出会いを語りたい。これよりさき私が未だ山口経済専門学校の教授にあつたとき、専門分野でもないのに、山口県農地委員に任命されて、農地解放の実態、問題点、を知る機会をもつたが、そのころ山口県農地部の招聘の形で晴丸さんに山口にまで講演にきていただいた時に同君との出会いがはじまる。なかなかの説得力に富んだ名講演で聴衆を感動させた。その後、私もまた日本学術会議の第一期会員となった時以来、交誼がつづく。縁は不可思議なもので、本学部の大学院経済学研究所に博士課程を設置するといふので、梯君とともに説伏にきたのが晴丸さんである。幾度かの話し合いでとうとう説き伏せられて、還暦を迎えるとともに大阪市大を去って本学に来て現在に至っている。近年、病気のため我儘をしている私を温く遇し下さっている経済学部の同僚各位にたいしては感謝の念で一ぱいである。その半面、主観的には教師に課せられた教学上の職責を一生懸命に果たすよう努めてきたが、客観的には、何ら立命館大学にたいしてプラスすることなく定年で去り行くことを申訳けなく思っている。

(一九七〇・二月・二〇)